

鳥箱先生とフウねずみ

宮沢賢治

青空文庫

あるうちに一つの鳥かごがありました。

鳥かごと云ふ^いよりは、鳥箱といふ方が、よくわかるかもしれません。それは、天井と、底と、三方の壁とが、無暗^{むやみ}に厚い板でできてゐて、正面^だ丈^だけが、針がねの網でこさへた戸になつてゐました。

そして小さなガラスの窓が横の方についてゐました。ある日一疋^{びき}の子供のひよどりがその中に入れられました。ひよどりは、そんなせまい、くらいところへ入れられたので、いやがつてバタバタバタしました。

鳥かごは、早速、

「バタバタ云っちゃいかん。」と云ひました。ひよどりは、それでも、まだ、バタバタしてゐましたが、つかれてうごけなくなると、こんどは、おっかさんの名を呼んで、泣きました。鳥かごは、早速、「泣いちゃいかん。」と云ひました。この時、とりかごは、急に、ははあおれは先生なんだと気がつきました。なるほど、さう気がついて見ると、小さなガラスの窓は、鳥かごの顔、正面の網戸が、立派なチョッキと云ふわけでした。いよいよさうきまつて見ると、鳥かごは、もう、一分もじつとしてゐられませんでした。そこで

「おれは先生なんだぞ。鳥箱先生といふんだぞ。お前を教育するんだぞ。」と云ひました。ひよどりも仕方なく、それから、鳥

箱先生と呼んでゐました。

けれども、ひよどりは、先生を大嫌だいきらひでした。毎日、じつと先生の腹の中に居るのでしたが、もう、それを見るのもいやでしたから、いつも目をつぶつてゐました。目をつぶつても、もしか、ひよつと、先生のことを考へたら、もうむねが悪くなるのでした。ところが、そのひよどりは、ある時、七日といふもの、一つぶの栗あはもちも貰ひませんでした。みんな忘れてゐたのです。そこで、もうひもじくつて、ひもじくつて、たうとう、くちばしをパクパクさせながら、死んでしまひました。

鳥箱先生も

「あゝ哀れなことだ」と云ひました。その次に来たひよどりの子

供も、丁度その通りでした。たゞ、その死に方が、すこし變つてゐただけです。それは腐つた水を貰つた^{ため}に、赤痢になつたのでした。

その次に來たひよどりの子供は、あんまり空や林が恋しくて、たうとう、胸がつまつて死んでしまひました。

四番目のは、先生がある夏、一寸^{ちよつと}油断をして網のチョツキを大きく開けたまゝ、^{ねむ}睡つてゐるあひだに、乱暴な猫^{ねこ}大将が來て、いきなりつかんで行つてしまつたのです。鳥箱先生も目をさまして、

「あつ、いかん。生徒をかへしなさい。」と云ひましたが、猫大將はニヤニヤ笑つて、向ふへ走つて行つてしまひました。鳥箱先

生も

「あゝ哀れなことだ。」と云ひました。しかし鳥箱先生は、それからはずっかり信用をなくしました。そしていきなり物置の棚へたな連れて来られました。

「ははあ、こゝは、大へん、空氣の流通が悪いな。」と鳥箱先生は云ひながら、あたりを見まはしました。棚の上には、こはれかゝった植木鉢うゑきばちや、古い朱塗りの手桶てをけや、そんながらくたが一杯でした。そして鳥箱先生のすぐうしろに、まっくらな小さな穴がありました。

「はてな。あの穴は何だらう。獅子ししのほらあなかも知れない。少くとも竜のいはやだね。」と先生はひとりごとを言ひました。

それから、夜になりました。ねずみ鼠が、その穴から出て来て、先生を一寸ちよつとかじりました。先生は大へんびつくりしましたが、無理に心をしづめてかう云ひました。

「おいおい。みだりに他人をかじるべからずといふ、カマジン国の王様の格言を知らないか。」

鼠はびつくりして、三歩ばかりあとへさがつて、ていねいにおじぎをしてから申しました。

「これは、まことにありがたいお教へでございます。実に私の肝臓までしみとほります。みだりに他人をかじるといふことは、ほんたうに悪いことでございます。私は、去年、みだりに金づちさまをかじりましたので、前歯を二本欠きました。又、今年の春は、

みだりに人間の耳を噛^かじりましたので、あぶなく殺されようとなりました。実にかたじけないおさとしてございます。ついては、私のせがれ、フウと申すものは、誠におろかものでございますが、どうか毎日、お教^{いた}へを戴^{ただ}くやうに願はれませんでございませうか。

「うん。とにかく、その子をよこしてごらん。きつと、立派にしてあげるから。わしはね。今こそこんな処へ来てゐるが、前は、それはもう、硝子^{ガラス}でこさへた立派な家の中に居たんだ。ひよどりを、四人も育てて教へてやったんだ。どれもみんな、はじめはバタバタ云つて、手もつけられない子供らばかりだったがね、みんな、間もなく、わしの感化で、おとなしく立派になった。そして、

それはそれは、安楽に一生を送ったのだ。栄耀^{えいよう}栄華^{えいぐわ}をきはめたもんだ。」

親ねずみは、あんまりうれしくて、声も出ませんでした。そして、ペコペコ頭をさげて、急いで自分の穴へもぐり込んで、子供のフウねずみを連れ出して、鳥箱先生の処へやって参りました。「この子供でございます。どうか、よろしくおねがひ致します。どうかよろしくおねがひ致します。」二人は頭をペコペコさげました。

すると、先生は、

「ははあ、仲々賢こさうなお子さんですな。頭のかたちが大へんよろしい。いかにも承知しました。きっと教へてあげますから。」

ある日、フウねずみが先生のそばを急いで通って行かうとしますと、鳥箱先生があわてて呼びとめました。

「おい。フウ。ちよつと待ちなさい。なぜ、おまへは、さう、ちよろちよろ、つまだてしてあるくんだ。男といふものは、もつとゆつくり、もつと大^{おほまた}股にあるくものだ。」

「だつて先生。僕^{ぼく}の友だちは、誰^{たれ}だつてちよろちよろ歩かない者はありません。僕はその中で、一番威張つて歩いてゐるんです。」

「お前の友だちといふのは、どんな人だ。」

「しらみに、くもに、だにです。」

「そんなものと、お前はつきあつてゐるのか。なぜもう少し、りっぱなものにつきあはん。なぜもつと立派なものにくらべないか

「

「だって、僕は、猫や、犬や、獅子^{しし}や、虎^{とら}は、大嫌^{だいきら}ひなんです

」

「さうか。それなら仕方ない。が、もう少しりっぱにやって貰^{もら}ひたい。」

「もうわかりました。先生。」フウねずみは一目散に逃げて行つてしまひました。

それから又五六日たつて、フウねずみが、いそいで鳥箱先生のそばをかけ抜けようとしますと、先生が叫びました。

「おい。フウ。一寸^{ちよつと}待ちなさい。なぜお前は、そんなにきよろ

きよろあたりを見てあるのです。男はまっすぐに行く方を向い

て歩くもんだ。それに決して、よこめなんかはつかふものではない。」

「だって先生。私の友達はみんなもつときよろきよろしてゐます。」

「お前の友だちといふのは誰だ。」

「たとへばくもや、しらみや、むかでなどです。」

「お前は、また、そんなつまらないものと自分をくらべてゐるが、それはよろしくない。お前はりっぱな鼠になる人なんだからそんな考はよさなければいけない。」

「だって私の友達は、みんなさうです。私はその中では一番ちゃんとしてゐるんです。」

そしてフウねずみは一目散に逃げて穴の中へはひっつてしまひました。

それから又五六日たつて、フウねずみが、いつものとほり、大いそぎで鳥箱先生のそばを通りすぎようとしますと、先生が網のチヨツキをがたつとさせながら、呼びとめました。

「おい。フウ、ちよつと待ちなさい。おまへはいつでもわしが何か云はうとすると、早く逃げてしまはうとするが、今日は、まあ、すこしおちついて、こゝへすわりなさい。お前はなぜそんなにいつでも首をちぐめて、せなかを円くするのです。」

「だって、先生。私の友達は、みんな、もつとせなかを円くして、もつと首をちぐめてゐますよ。」

「お前の友達といつても、むかでなどはせなかをすつくりとのかばしてあるいてゐるではないか。」

「いゝえ。むかではさうですけれども、ほかの友だちはさうではありません。」

「ほかの友だちといふのは、どんな人だ。」

「けしつぶや、ひえつぶや、おほばこの実などです。」

「なぜいつでも、そんなつまらないものだけで、くらべるのだ。えゝ。おい。」

フウねずみは面倒臭くなったので一目散に穴の中へ逃げ込みました。

鳥箱先生も、今度といふ今度は、すっかり怒ってしまつて、ガ

タガタガタガタふるへて叫びました。

「フウの母親、こら、フウの母親。出て来い。おまへのむすこは、もうどうしても退校だ。引き渡すから早速出て来い。」

フウのおつかさんねずみは、ブルブルふるへてゐるフウねずみのえり首をつかんで、鳥箱先生の前に連れて来ました。

鳥箱先生は怒って、ほてつて、チョッキをばたばたさせながら云ひました。

「おれは四人もひよどりを教育したが、今日までこんなひどいぶじよくを受けたことはない。実にこの生徒はだめなやつだ。」

その時、まるで、嵐あらしのやうに黄色なものが出て来て、フウをつかんで地べたへたゝきつけ、ひげをヒクヒク動かししました。それ

は猫^{ねこ}大将でした。

猫大将は、

「ハツハツハ、先生もだめだし、生徒も悪い。先生はいつでも、もつともらしいうそばかり云つてゐる。生徒は志がどうもけしつぶより小さい。これではもうとても国家の前途が思ひやられる。」と云ひました。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第八卷」筑摩書房

1979（昭和54）年5月15日初版第1刷発行

1984（昭和59）年1月30日初版第7刷発行

入力：林 幸雄

校正：久保格

2002年6月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

鳥箱先生とフウねずみ

宮沢賢治

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>